『ロード・ジム』におけるマーロウの語りについて

村 瀬 暁 生

『ロード・ジム』はブラックウッド・マガジンに1899年から1900年にかけて連載され、当初は短編小説として構想されたものである。コンラッドはもともとはパトナ号事件について書く予定であったが、書いていくうちに作品はどんどんふくらんでいき、、後半のパトゥサンでのエピソードを含むものになったそうである。このようにこの作品はコンラッドの当初の思惑を越えて発展したものであるが、大きく二つに分けると、前半のパトナ号事件に関する話と、後半のパトゥサンでの話に分かれ、主な語り手は両方ともマーロウであるが、その内容は大きな違いを示しているようだ。しばしば言われているように、前半に見られた複雑な語りと繊細で緊張感に満ちた心理描写は、後半では無くなり平板でいくらかステレオタイプな冒険物語になってしまい、両者の違いがこの作品に不均衡なイメージをもたらしているようだ。しかしマーロウの語りという点では一貫しているわけで、話の内容とそれを取り巻く状況の違いがこのような違いをもたらしているのではないだろうか。ここではこの作品の展開に沿って、その物語のスタイルの変化を詳しく見ていきたい。

まず『ロード・ジム』の最初の4章は超越的な語り手によって語られ、その視点からジムは紹介される。その語りはジムを客観的に、イギリスにいる彼の父の事や、ジムの訓練船でのエピソード、そしてパトナ号に乗り込んで航海が始まり、事故の直前の船に何らかの異常が起こるまでが語られる。この最初の語り手はパトナ号事件の真相については説明することはせずに、その後の経過は5章以後のマーロウの語りへと引き継がれる事になる。この最初の語り手の役割はジムをロマンティックで冒険物語の好きな、夢見がちの青年として呈示する。その語りはジムに対してアイロニカルではあるが、信頼できる語りとして受け入れることができよう。しかしそのような語りの安定性はマーロウの語りの開始と共に無くなり、曖昧さが取って代わることになる。前半の謎であるパトナ号事件についてはその事件に関係した者の様々な証言の集積として表されるのだ。目撃者のいない夜の海で実際に何が起こったかは不確実なままで、はっきりとしたことは解らないのである。いわばこの事件の真相はこの作品の前半の語りの空白なのであり、それをめぐって様々な話がマーロウによって集められることになる。しかしジム自身の証言も含めて、そのどれもが不完全なものであり明確な像を結ばないものである。5章以後、マーロウの語りはパトナ号事件の謎の周りをめぐるばかりで、決して確実な事実というものに突き当たることはないのである。『闇の奥』におけるクルツという人物と彼の経験したことが、マーロウの語りにとって決して言い表せない空白であったように、この作品のの前半部においてパトナ号事件はそれと同じ役割を果たしている。クルツの場合がそうであったように、この空白の設定の仕方はマーロウの持つ倫理的な態度と関係がある。パトナ号が事故にあった際のジムの行動は船員としての倫理に反するものであり、その責任を放棄した許されざるものであった。いわば船乗りの moral code が破られた時に謎が生じるのであり、それがマーロウに興味を起こさせて、自分でも明瞭な動機のないまま、審問の場に赴き、ジムと関わることになるのだ。

マーロウはパトナ号事件についての真相を探るべく、関係者の証言を集め、事件を再構成していく。例えば彼が気のふれたパトナ号の技師を病院に尋ねるくだりでは、技師は“俺は船が沈むのを見た”と言う。これはもちろん後に誤った証言であるとわかるが、彼の狂った頭にとっては真実なのである。さらに見捨てられ、漂流しているパトナ号を見つけたフランス船の中尉の証言はそのプロフェッショナルな視点から事件にまた違った光明を与えてくれる。そしてマラバール・ホテルでのジム自身のマーロウとの対話における彼から見た事件についての説明は最も決定的なものであるが、彼の話とても事件に関わる多くの証言の中の一つにすぎないのである。彼等の証言はどれも個人的なもので、事件についての客観的な事実という空白は決して信頼できる言明によって埋められることはないのである。

ヒリス・ミラーが言うように、「『ロード・ジム』においては信頼できる視点というのは存在しない」のである。[1] ジム自身もマーロウに向かって自分の説明は「嘘ではないが、にもかかわらず本当でもない」(p.140)[2] と言うように、彼も自分の行動をしっかりと把握できず、その時自分がどう行動したかははっきりとしない。彼が言うように、「僕は(船から)飛び下りたらしい」のであり、もはや信頼できる語り手がいなくなった以上、読者にとっても、またジム自身にとっても彼の行為はあやふやなものとならざるを得ないのである。だから第4章の裁判の場面で語り手はこのように述べる。「彼等は事実が必要なのだ。事実か!彼等は彼から事実を要求するのだ。まるで事実が何かを説明してくれるかのように。」(p.29)裁判所が必要とするのはいわば official languageであって、審議を出来るだけ円滑に進めるために必要なものでしかない。それらはいささか乱暴に事実と言う名の下に起こった事を整理し、容易に取り扱えるものにしてしまい、ジムが話したいと思う事は妨げられ、質問に対してイエスかノーで答えることを強制するものなのだ。このような審問においてはあらかじめ言うべきことが定められているのだとも言えよう。それらは極めて事務的に事件を扱うことを可能にするもので、マーロウの求めているのはもちろんそのような言語では無いし、ジムも自分の話したいことを話せるわけではない。そのため後にマーロウという聞き手を得ることによって、ジムは初めて自分の体験を思う存分話す事ができるのである。

このように超越的な語り手がいなくなって、明確な事実に対する言明が不可能な以上、マーロウの語りもそれに応じた性格を帯びざるを得ない。彼の話は当然絶対的なものではない、限界を持ったものであり、繰り返されることによって、絶えざる修正の可能性を含んでいるのだ。それは何故『闇の奥』の時のように最初にもう一人の語り手を置くことをせずに、超越的な語り手を選んだのであろうかという問題に関わってくる。つまり『ロード・ジム』においてはマーロウの語りの複数性が強調されているからであろう。『闇の奥』でのマーロウの話は場所と時とが限定されたものであるが、『ロード・ジム』ではそうではない。イアン・ワットが指摘しているようにマーロウの語りは異なった時と場所において複数回行われているのだ。彼の語りの複数性は、例えば4章の終りでマーロウの語りの特徴を示す時のように、wouldという習慣を意味する助動詞の使用によっても明らかなのだ。[3] マーロウはジムについての話を何回も違った相手に向かって話しているのであり、だから『闇の奥』の時のような「私」は使えなかったのである。その聞き手の多様性により、一人の人物の形として具体化する事は出来なかったのであろう。例えば5章から35章までのマーロウの一見連続した語りも、その内容から見て同一時期に話されたものではないようであり、恐らくその度ごとに微妙に異なる彼の話を編集したとでも言うべきものなのであろう。

マーロウの語りのもう一つの大きな特徴は、彼が目で見るものと言い得ることとの関係であり、彼の語りは視覚的な要素を前提として語られていくのだ。マーロウの語りが開始される場面でも、まず語り手は審問の場面でジムの意識の中に入り込み、彼の意識を通して彼の事をじっと見ている一人の人物に気付かせる。ジムを見ているマーロウを、ジムは見ることによって語りの移行が起こるのである。要するに上から俯瞰的に見るという構図からなるべく自然に、マーロウがジムを見るという視覚による関係による構図へと移行して、彼の語りは始まるのである。この後は見るマーロウと見られるジムという関係においてマーロウは彼について語ろうとするのであり、この作品がマーロウの見るという要素から始まり、成り立っていることを示すと共に、その語りは個人的で有限なものであるのだ。これにより超越的な視点は出来るだけ避けられ、彼が直接得られない情報については他の人物の話に頼ることで、マーロウという個人を通して様々な物語が入ったり出たりするさまを描く事になるのである。このようにコンラッドはマーロウという語り手を置く事によって話の対象との間に間隔を開けて、それにより、何かについて書く、語るという問題をマーロウに肩代わりさせ、自分自身はそれによって明らかになる言説についての諸特徴を問題とする事ができたのである。いわばコンラッドはマーロウに自らの創作上の問題をそのまま押し付けたとも言えるのであり、それは言葉が言葉でしかなく、一見その対象と思えるものや、目に見えるもの、あるいは伝達可能な確定した意味という観念とは別の物であるという認識に基づいているのだ。

故にマーロウはジムについて語ろうとするのだが、うまくいかない。彼はマーロウが言うように one of us, 我々の一員である、つまり船乗り仲間であるからであると同時に我々もまたいつジムと同じ過ちを犯すかも知れない人間的な弱さを持っているという共感からでもある。ジムはまずパトナ号事件と関連してマーロウの視界に入ってくるのであるが、しかし厳密にはパト

ナ号事件はマーロウの語りの対象とは言い難い。なるほどマーロウは事件についての証言を集めるが、彼自身はそれについて語ることは出来ないからである。パトナ号事件はマーロウの語りの中で、いわば入れ子構造の役割を果たしているのであり、この点において『闇の奥』よりももう一段、この作品は複雑な構成になっているのだ。マーロウの語りの関心は事件そのものより、ジムという人物の形をとってその対象となるのであるが、それは実物を見る前にマーロウにとってクルツという名前のみが彼を代表したように、ジムという固有名詞を語りの対象とすることによって、一応は語りの対象を保持できるからである。ジムという名前に付随する諸々の属性はさておいて、ひとまずジムと発音することによって、一応はその対象を名指すことができ、それを中心として語りを続けていけるからである。しかしジムの名前以上の事になると、under a cloud という言葉が示す通り、見定めがたいものであり、実際マーロウの語りはジムについて明らかにすることは少なく、逆に彼を見ることによって、マーロウは同時に自らの事をも語っているのである。ジムは自分の若い時のようでもあり、自分が世話を見た若い船員の一人のようでもある。マーロウの語りがジムについて明らかにする事と言えば、彼が相変わらずロマンティックなヒロイズムに取り付かれていることのみである。ジムは現実と夢とを一致させる機会を逸した事を後悔しつづけ、再び両者が一致するような機会が来ることを待ち続けているのである。年齢を重ねて海についてのロマンティックな夢とその幻滅を知り尽くしたマーロウは、そんなジムに対して時には腹を立てることもあるが、失われた過去の若さへの思いから彼と共有できる面も多く持ち合わせているのだ。

彼の語りは一見その対象と見えるジムに向かっているというよりも、その語りの特徴として彼が見たものをうまく彼が言うことができないという点にその本質があるのである。マーロウの語りはその話し言葉という点においてその問題と格闘している。それは書かれた言葉と違って物として残り、確定するものではなくて、何回でもやり直しがきく性質のものであり、それが彼の語りの複数性と関連しているのだ。ジムの裁判の場面でマーロウが考えるように判決が持つような finality というものは彼の語りには存在しないのであり、それはジムとパトナ号事件について決定的な説明が不可能であることであり、また話し言葉としてその完結を絶えず先延ばしにしていく、または聞き手の理解に任せるということになるのである。つまり対象について語り、明らかにするというよりも、その話を誰かの前で話すことに目的があるのだ。マラバール・ホテルでのジムのマーロウへのパトナ号事件についての話も、自分の経験は誰かに話さなければならないのであり、そうする事によって経験は客観化され、初めて人に伝えられて意味を持つのである。[4] しかしマーロウが言うようにジムが求めているのは物事の真偽を決定する judge ではなく、彼と同調してくれる ally であり、共犯者である以上、マーロウ自身の語りもいくらかはジムの話のロマンティックな側面を共有せざるを得ないのだ。マーロウはその事について、 'He was not speaking to me, he was only speaking before me 、 in a dispute with an invisible personality, an antagonistic and inseparable partner of his existence- another possessor of his soul.'(p.93) と言うが、ジムは話の相手はいわばヒーローになるはずであった自分に向けられているのだ。マーロウはジムと同じ船員である故に彼の話が良くわかる所もあるのだが、マーロウにはジムの話の内容よりもその条件、それが何を前提として話されているかという点を強く意識するのである。このようにこの作品の登場人物等の話はその内容よりも、その話の存在条件や成立条件といったものに関わっているのだと言えよう。

例えば前述の錯乱したパトナ号の技師の、船が沈んだのを見たという話は真実ではないが、狂気の人物の話であるという観点から考えれば、それは真偽の観念とは相入れないものである故に正当なものであろう。またボートで逃げ出した船長らが周りに何もない大洋上で自分たちに都合のいい話を作り上げる場面にも物語というものがその成立の状況に支配されるという面がよく現れている。全く目にするものも聞くものもない海の上では言葉だけが事実と離れて一人歩きしていくのであり、そのような環境においては物語は現実という土台なしでも作られ得るのである。ジムは自分の話も船長らの話と同じく、いい加減な話だと述べているが、パトナ号事件に関しては絶対の事実というのは無い以上、そのような思いは必然的なのである。逆に十分な話が出来るには自分の見たものと言い得る事が一致するような幸福な瞬間がなければならない。しかしこの作品では物を見るのに十分な光と言葉がなかなか一致することなく、その不一致にマーロウの無力さというものは起因するのである。

ジムに関しても、その視覚的なイメージが先行し、それを言い表そうとするマーロウの試みが後を追いか

けるわけで、それらは中々両立しないのであるが、初めてマーロウがジムを見る場面は視覚的なイメージとして彼のその後の語る試みを決定するものである。それは第5章でマーロウがパトナ号事件の話を聞いて、港湾事務所の前でパトナ号の乗組員達がやってくるのを見る場面である。マーロウは日陰にいて、ジムは日の当たる場所にいる、つまり見るためには十分の光があるわけで、おまけに自分は日陰にいて、いわば一幅の絵を見るかのような状況にいるという、非常に好都合な位置において彼はジムを見るのである。そしてマーロウはジムの風貌を信頼できる船乗りとして the right kind of looks と描写するのだが、その目に見える印象と彼がパトナ号事件で果たしたこととの不一致が、マーロウを悩ませ、興味を抱かせると共に、その不一致ゆえに彼の語りが続いていくのである。そしてこのシーンはマーロウがジムを最後に見る場面、35章の終りでの船で去るマーロウが浜辺のジムを見る場面に対応しているのだ。太陽は沈み、段々と暗くなっていく浜辺に立つジムは白い姿になって、マーロウの視界から消える。そしてその目に見えるジムの姿を失った時がマーロウによる直接的な語りの終りでもあるのだ。

マーロウの語りが『闇の奥』の時と異なるのは、クルツがマーロウと出会った後、すぐに死んでしまい、彼の過去の所業を相手にしなければならないのに対して、ジムは生き続けなければいけない、つまりジムと一緒にいることによって生身の人間を扱わなければいけないという事であり、ジムに関しては完結などはおよそ期待できないわけである。ジムが生き続けるから、この作品も終ることが出来ずに、どんどんと伸びていったかのようでもある。これは物語というものが基本的には過去の事しか扱えないということと関係しているのだろう。語りと過去の出来事との関係はジムとパトナ号事件との関係においてもよく現れている。ジムにとって、決定的な事件であるパトナ号事件はもう起こってしまった過去であるが、ジムはその過去にあまりにも強く囚われ過ぎていて、人生において新しいスタートをきるためには過去と訣別した新しい時間と場所が必要なのであるが、ジムの運命を決定付けたジャンプについて、マーロウはそれは彼の知らないうちに起こってしまったものであり、しかも二度と繰り返し得ないものだ、と述べている。このような過去の出来事自体は繰り返しえないものであり、繰り返すことができるのはその出来事についての発言のみである。しかしジムがいくら彼の説明を繰り返してみても、その行為自体を捕らえたり、やり直すことはできない。それは過去において起きた取り返しのつかない事であり、一方その出来事についての語りはまたその対象を捕らえ得ないが故に成立し、反復できるものでもあるのだ。

このように語りは本来過去のことしか扱えないものである以上、パトナ号事件という現在のジムを扱うことを避けることを可能にする過去の出来事に関する話題が終わってしまった後は、マーロウのジムについての語りは袋小路に行き着くしかない。その現在時を扱うことの困難さは、15章でマーロウがジムを自分の部屋に連れていき、手紙を書く場面に如実にあらわれている。マーロウは世界に居場所がなくなったジムが引き籠もれる場所であるホテルの部屋に連れていく。この場面ではパトナ号についての話も終わって、他の人の話に頼ることもできないので、マーロウはジムについて自ら語らなければならないのだが、彼はそれを避けて、手紙を書くことで逃げようとする。それは彼がジムと一緒にいる時間を扱うことが出来ずに、手紙という離れた場所と相手に向かって言葉を綴ることによって、その責任を回避するのである。マーロウは超越的な語り手ではないので、ジムについて断定的に話を進めていくのは不可能な事なのである。「私はジムの感情に耐え得る能力があるとは主張しない。私は手紙に避難所を見出だした。必要なら全く知らない人にまで手紙を書いただろう。」(p.173)彼の語りは直接ジムという対象を扱うことはできないのであり、手紙というそれを読む者の理解や反応をすぐに期待しなくてもよい媒体に頼ることによって、現在のジムを描写する責任を逃れるのである。実際彼はその後ジムを他の人に預けて自分の前から追い払い、そしてその友達からの手紙という形でジムについての消息を知り、その手紙の内容自体を述べるという形でしかジムについては語れないのである。つまり、コンラッドがしばしばその作品を人から聞いた話や新聞の記事を基にして創作を始めたように、ジムについては他人から聞いた話として伝えるしかマーロウにはこの物語を続けるすべはないのだ。だから最後にはパトゥサンにまで彼を追いやることによって、自分の責任を回避するのであり、マーロウ自身はジムについての物語のネットワーク、連鎖を広げ、続けていくことによってのみにおいて、その役割を果たすのである。

だからマーロウは自分の話を聞き手に理解させるために、君達ならわかるだろう、という風に理解を促す形で話を進めていくのだ。そこには彼の話は主にマー

ロウと同じ経験や価値観を持つ船員仲間に向けられたものであり、そのような人々の方がそれだけ話を理解しやすいのだという含みがある。マーロウは自分の話の一般的な伝達、理解についてはあまり自信がないのであり、それはクルツの時の話がそうであったように話としては万人向けのものでないため、その流通力は非常に弱いものであるということが言えよう。というのもジムとパトナ号事件については、それよりはるかに流通する力を持ったヴァージョンが存在するからだ。それは新聞等のジャーナリスティックな媒体によるものや、噂などのすぐに広まる性質のものであるのだ。まずパトナ号事件についての噂は誰もが知っているものであったと紹介され、しばらくはマレー諸島近辺の人々の話はその事について引っ切り無しであったわけであり、本国においても大スキャンダルとなった事件である。マーロウが言うようにその噂は「時の流れや記憶のはかなさに対して抗う並外れた力を持っていた」わけである。そして事件についてはジムが本国の父親が新聞で読んだに違いないというように、新聞記事という形で世界に広まるのである。これらの噂の根強い生命力は当時のマレー諸島において海の仕事に携わる人々という共同体、それは様々な国籍の人々から成るのだが、そのような共同体意識と密接に関係しているのだ。彼等は同じ話を共有することによって、共同体意識を強めることを果たしているのであり、また同時にその意識がパトナ号事件についての話が人の口から去らない理由でもあるのだ。

それらに対してマーロウの話はそれらのライヴァルと争うような性質のものではない。ジムという生きた人物を相手にしている以上、彼は他人から見て容易に定義できるようなものではないのだ。彼はマーロウの話の対象としてよりも、彼の話と聞き手の理解とのギャップに存在するのである。マーロウ自身がこの事についての考えを漏らす箇所は次のようである。

> He exists for me, and after all it is only through me that he exists for you... You may be able to tell better, since the proverb has it that the onlookers see most of the game... And besides, the last word is not said... probably shall never be said. Are not our lives too short for that full utterance which through all our stammerings is of course our only abiding intention? (224 − 5)

このように伝達の不可能性と最後の言葉、決定的な言葉を発する不可能性をマーロウは痛感しているのだ。もちろん最終的な結末をつける事はできずに、ただそれを目指して話すのであるが、必然的にそれらの発言はstammeringにしかならないのである。もっともその様な最後の言葉に辿り着くのならマーロウの語りそのものが消滅してしまうだろう。それは『闇の奥』におけるクルツのように 'The horror' と言うことによってのみ果たし得るものであり、それゆえにマーロウはクルツのことを羨むのである。

マーロウの話を絶えずその到達する事のかなわぬfinalityへの途上にあるものなのだ。それは各人の間で互いに話のやり取りをする事によって、理解が増していく可能性に依存しているのだ。例えばジムの審問後、謎の自殺をとげるブライアリーについても、マーロウにその話をしてくれるジョーンズという男は何故彼がその様な行為をしたのか理解できないと語る。しかし今の(話をしている)マーロウにはジョーンズよりもその理由がよく理解できる。マーロウは審問中のブライアリーの顔を思い出しながら、「その時は彼の心の状態は(私には)今よりももっと謎めいていた」と言うのであり、ジョーンズの話を聞くことによって、また自らも話をすることによって彼はもっとブライアリーの心理を理解できるようになったのである。これは物事の理解の可能性は話をやり取りする過程によって増していくものであることの一つの例示であろう。

この作品の前半と後半をつなぐ重要なエピソードとして、ジムをパトゥサンへと送り込む際に、マーロウはスタインというマレー諸島の様々な場所に精通し、いろいろな物語を知っている人物に助けを求めに行く。マーロウはジムについて彼に話し、それに対して蝶や甲虫の収集家でもある博物学者のスタインはジムはロマンティックであると判断する。マーロウは自分の求めていた答えがあまりにも単純だったことに驚くが、スタインはマーロウから間接的に話を聞いたうえで判断を下しているのであり、そのためマーロウよりも客観的な判断がしやすいのである。スタインの見方は彼の昆虫の標本の一つを分類するような視点をもって、ジムを分類するのである。しかし、スタイン自身もかなりロマンティックな人生を送ってきた人物であり、長年夢見ていた珍しい蝶を捕まえるという、夢と現実が一致する幸運な機会を捉えることが出来た人物である。マーロウと同じくスタインの言明も自らの事を語っているのであり、ジムにつけるロマンティックというラベル以外は何ら決定的なものではないのだ。例えば、スタインの言うセリフ、'A man that is born falls into a dream like a man falls into the sea...'は、いろいろと解釈で

きる文句であるが、[5]ここではその曖昧な意味合いよりも、この発言が彼の部屋のランプの光の届かない場所で発せられている点に注目すべきであろう。暗闇の中で声だけになってのみ、このような何かしら意味ありげな事を言えるのであるが、ランプの明りの圏内に戻ってきたスタインにはもう先程の自信は見られない。暗闇の中では彼の声はまるでどこからか力を得たかのように強くなったのに対し、明りの中では ´The light had destroyed the assurance which had inspired him in the distant shadows.´(p.214)となるわけである。このようにここでも発話の自信は光、明るさといったものとは両立しないものなのであり、このスタインの発言のシーンはそれを象徴的に示しているのだ。実体のない声だけの存在になることによって、何とか発話は成り立つのであり、それが明るい光の下での可視性とは相入れないものなのだ。このようにスタインのみならずマーロウの語りの困難さも目に見えるものと言いうるものとの差異にあるのであり、その原理は『闇の奥』からこの『ロード・ジム』まで一貫して作品を支配しているものであろう。それは目に見えるものと言い得るものとは別のものであり、それらは互いにどちらに還元できないものである、ということである。ゆえに両者のずれは必然的なものであり、それらが一致しない所にこの作品の中の多くの発話の困難があるのである。[6]

『ロード・ジム』の後半はパトゥサンというマレー諸島の中の小さな村を舞台としている。先程も述べたようにジムがパトゥサンへ行った後は、この作品はいくらか平板な、ありふれた冒険物語のようになってしまうと見られているようだ。しかし後半も語り手は依然としてマーロウであり、その語りの順番は時間軸に沿ったものではない複雑なものであり、彼がジムや他の人から聞いた話で語られていく。つまり、後半の冒険物語化はマーロウが話を得る状況が前半とは異なっていることに拠るものと見るのが妥当であろう。35章までは引き続きマーロウの口頭による語りであり、その後は彼からの手紙をある一人の聞き手が受け取るという形で示される。35章までの話はマーロウは実際にパトゥサンへ行ってジムと会い、自ら見聞きしたことにも拠るが、主にジム本人から聞いた話に基づいている。36章からの手紙の内容はジムの死後、ジュエルやタム・イタム、そして死に際のブラウンから彼が聞いた話に拠っていて、マーロウが自分で見聞きしたわけではないためか、事実の羅列による物語となっている。これらの変化は作品の前半の場合とは違った条件、つまり情報の入手方法、つまり誰から話を得るかという点や、その物語が生まれる場所の違いといった点に制約されているのだ。そしてそれはパトゥサンという場所の特異性に関連しているのである。

パトゥサンは商業ルートから外れた所に位置し、政府もあまりその意味での重要性を認めてはおらず、スタインのみが個人的に知っている場所でもある。そこはマレー諸島で貿易に営む船乗り達からも隔絶した所であり、パトナ号に関する醜聞が伝わってこない場所でもあるのだ。その結果としてつくられる物語は他の場所とは異なり、周囲から離れているため、そこだけの独自の物語がつくられるのだ。新しい機会を求めるジムにとって、過去の出来事の噂が侵入してこないパトゥサンは絶好の場所であるのだ。マーロウが言うようにそこでのジムの名声は ´there are no externals´(p.226)であり、逆にパトゥサンでのジムの話も外の世界に伝わることはないのである。マーロウはパトゥサンは過去のない場所であり、ジムの名声を特徴づけるのは、沈黙と薄闇であると述べている。それは光の少なさと言葉の少なさを意味するものであり、そのような状況の下でジムについての神話は出来上がるのだ。そしてその神話は正確さや事実との合致とは関係なくパトゥサンとその近辺に広まるのである。恐らくその中にはジムのことを実際に見たことのない人々もたくさんいるであろう。彼等は伝説としてジムについて知っているだけであり、そのためにそれが現実のジムと一致している必要はなく、彼には超自然的な力まで付与されてしまうのである。またジムが大きな宝石を手に入れたという噂が紹介されるが、その話も実際には誰もその宝石を見たことがないからこそ、広まっていくものであるとも言えるのである。マーロウが知るのはそのようなジムについての伝説や噂であって、それらはパトナ号事件についての話が船乗り達の共同体意識とその倫理コードを破った者に対してその意識を保持する事に結び付いていたように、パトゥサンという共同体の保持に関わっているのである。それはジムについての伝説が、彼がパトゥサンにとって脅威であったシェリフ・アリに対して勝利を治めてパトゥサンに平和と秩序をもたらした時から流通し始めるからである。

このような状況がこの作品の後半の変化の条件とも言えるだろう。ジム本人がパトゥサンについての情報をマーロウに与えるのであって、ジムはその場所における特権的なヨーロッパ人の語り手であるのだ。つま

りマーロウはジムが自分の行いについて話した内容を伝えているのである。パトナ号事件の際は、ジムは主に他人によって語られ、判断される存在であり、自らの説明は妨げられ,他人の好奇の的であったのだ。しかしパトゥサンではジムは自分についての話を自分で話せるのである。彼のロマンティックな願望を現実化できたパトゥサンにおいてはその話が典型的な冒険物語になるのも当然である。ジムの夢を実現できるような前時代的な状況がパトゥサンにあったことにも拠るが、ジム自身の欲望がその物語をコントロールしているのであるから、彼は自分の物語の中で英雄になれ、おまけに自分の口でその事について語ることも出来るのである。そのためにはパトゥサンという他の地域から隔絶した場所、特に他のヨーロッパ人の情報網から外れた地域が必要であったのだ。ジムのパトゥサンでの幸せは自分で自分のことが語れるという幸福なのである。だからジュエルとの恋愛もステレオタイプのラヴ・ストーリーになるのである。マーロウもその事はよく意識していて、「僕が今語っているのはラヴ・ストーリーだというのを忘れないでくれよ。」と聞き手に注意するのである。ジムがドラミンのことを描写する時も、「彼等は本の中の人々のようじゃないか」と言い、彼の見方が相変わらず変わらない事を示すと共に、パトゥサンの人々が平板に描写されるのもジムのこのような見方に拠っているのであろう。そしてジムの共犯者であるマーロウ自身もこの様な見方にいくらか影響され、それを共有しているのである。彼等はあくまでもヨーロッパ人の目でドラミンらを見て、ヨーロッパ人にのみ通用する話を伝達しているのだ。

しかしこのようなジムの成功物語を疑いの目で持って見ることの出来る人物もいる。それがジムの恋人であるジュエルの役割である。この作品中、唯一の女性であるジュエルとマーロウが話をする場面は日が沈み薄暗闇の状態で成されていることが特徴的であろう。女性という存在はマーロウにとって一種の謎であり、二人の対話の場面の光の少なさはマーロウの発言やジュエルの扱いの自信の無さに対応しているのである。彼女はジムの言葉を疑える人物であり、彼が過去の何かにとりつかれていることに気付いている。そしてマーロウは最後にジムと同じ事を言ったということで、ジュエルに嘘つきと呼ばれてしまうのだが、彼がジムは絶対に帰らないし、外の世界も彼を必要としていないと言うことで、ジムのロマンスに加担しているのだ。クルツの婚約者との時はマーロウは嘘をついて相手に合わせたが、ここではロマンスは女性の理解から外れた所にあるようだ。ジムの死んだ後もスタインの家でジュエルはジムのことを理解しようとせず、スタインはそのうちにわかると言って慰めるしかないのである。女性への物語の伝達、理解はかなえられず、『闇の奥』の時もそうであったように彼女らは伝達の連鎖から外れているのである。[7]

もう一人のジムの成功物語を切り崩すことの出来る人物はジムの前任者であるがパトゥサンに住み着いてしまったコーネリウスである。彼はジムが語る物語の中では取るに足らない存在であり、ほとんど彼の眼中にはない人物である。彼は 'he was perpetually slinking away' と書かれているようにいつも周辺をうろついている人物であり、この話の「前景にもいなければ、背景にもいない」のであり、その卑劣さによって敵にもならないために、ジムの物語の範囲から外れている存在なのである。その分、彼は外から見ることによってジムの物語の自己満足を崩すことの出来る人物なのだ。マーロウだけはコーネリウスの危険な存在に気付き、彼からジムについての警告、彼がまるで小さな子供同然だという、予言を受け取ることになるのである。ジムの場合に見られるように自分で自分の事を語るという自己言及には絶えず矛盾がつきまとうのであり、語りの中の自分と存在する自分とは異なるものなのである。コーネリウスはそのようなジムの物語の限界を示唆する存在であり、マーロウはそのことを意識できるのである。ここでのコンラッドの試みは冒険ロマンスというジャンルを逆に現実の方にあてはめようとして、そのジャンルが破綻するさまを示そうとしているのだ。

最後にはブラウンとコーネリウスが結託してジムを破滅に導くことになるのだが、その経過は36章以後、マーロウからのある一人の特権的な男への手紙という形で伝えられることになる。何故ここでマーロウの口頭による語りが終わって、手紙という形式になるのかは定かではない。マーロウの語りがあまりにも長くなってしまったという事もあるのだろうが、手紙というある特定の人の元に届くという形式は、その物語を受け取る側を限定していることを示している。マーロウは話しながら自分の話を理解してくれる人物を選んでいたのであり、手紙を受け取る特権的な男は適当な人物として選ばれたのだろう。彼はどうやら引退した元船乗りでかつてはヨーロッパ人以外の人種と関わりを持った、ある程度の人種的偏見の持ち主でもあるようだが、ジョン・バチェラーが指摘するように当時のブラ

ックウッド・マガジンの典型的な読者像にあてはまるようである。[8]コンラッドは自分の作品の読者を想定してその作品の中に取り入れてしまったと言えよう。テリー・イーグルトンが言うようにコンラッドは自分の作品の読者の存在について非常に懐疑的であり、またコミュニケーションの観点からも作品が理解されるかどうかも不確実なものと見ていたようだ。[9]読者の作品内への取り入れはコンラッドの不安と期待の具体化でもあるのだろう。前にも述べたようにコンラッドの問題はマーロウへと肩代わりされているので、コミュニケーションの不確実性はマーロウにとっても大きな問題であるのだ。マーロウは絶えず自分の話が理解されるかどうかを念頭において話している。ジムに関する物語は万人向けのものではないので、最後にはたった一人の人物に向かって彼の最後は明らかにされるのである。それは聞き手を選別しているのであり、サイードがコンラッドとニーチェを比較して指摘するように、コンラッドにおいては聞き手の資質が試され、適格かどうかが選ばれているのだ。[10]そしてそれは伝達による理解の可能性をも期待しており、マーロウは 'Perhaps you may pronounce – after you've read.' と言って、読み手の側に何らかの考えがまとまり、それをさらに他の人へと伝えていく事を望むのである。

この手紙の内容の情報源はそれまでのパトゥサンにおけるジムの話とは異なる。マーロウはもはやジム自身から話を聞くことはできずに、スタインのもとに逃げてきたタム・イタムやジュエル、そして断末魔のブラウンからの話を総合して語られるのである。つまり当然のことだが、ジムは自分の死を自分で語ることは出来ずに、再び他人によって語られることによって終わるのである。ジムの自分で自分を語るという夢は短い期間のものに終わったのであり、マーロウはまた他人の話に頼らざるを得なくなるのだ。ブラウンはジムの無意識ともいうべき存在であり、パトゥサンに入ってくる悪としてのヨーロッパ人なのである。ジムの白人としてのロマンティックさとヒロイズムの裏面である暴力、略奪をブラウンは体現しているのだ。さらにジムの物語の崩壊は言語の面からも行われる。それまではジムが特権的にマーロウに話すことによって、パトゥサンからの情報を伝えていたわけだが、ブラウンはもちろん英語を話せる人物であり、同じく英語を話すことができ、カシムの陰謀の際にも通訳ができるコーネリウスとが共謀することによって、ジムのとは違う物語、側面を提示できるのである。それにより、ジム以外の人物による話の可能性が生まれてくるのであり、ブラウンとコーネリウスによる新しい英語によるネットワークが出来上がり、それがジムの不意を打つことになるのだ。そして川をはさんでのジムとブラウンの対決の場面でブラウンはジムの過去を知っているかのように、自分との共通点を強調するのである。パトナ号事件を示唆するようなブラウンの言葉遣いにジムの無意識的な本性が現れる。このようにジムが言葉によって不意を打たれて本性をさらけ出してしまうという場面は繰り返し作品中に現れる。パトナ号での巡礼がジムに求める 'water' では飲み水と船への浸水を取り違えるし、6章のマーロウとの口論の原因となる 'cur' なども必ずしも彼のことを指し示しているわけではないのだが、彼の恐怖や屈辱を表面化させてしまうのである。ジムはロマンスというジャンルにずっと取り付かれていて、それに従って行動しようと望む点において、自らの行動をそのジャンルに支配されているのだが、同様に言葉というもののそれと意図することなく相手の急所をつく力にも支配され、思わず自分を暴露して、弱点をさらしてしまうわけである。

そしてジムはブラウンを逃がしてやることにするのだが、コーネリウスの陰謀により、デイン・ワリスを殺されてしまい、その責任を取って彼はドラミンに撃ち殺される。逃げろと言うジュエルの勧めを断って死ぬジムは最後まで一貫してロマンティックな夢に従ったのである。そんなジムをジュエルは false であったと言って責めるが、スタインは彼は true であったのだと言う。彼の死はいつ裏切るかも知れない運命に対する勝利であり、死の瞬間に彼は永久にヒロイックたる機会をついに捕らえたのである。ジムの最後の a proud and unflinching glance は彼にとってのヒロイックな死を遂げることによって、もはや現実に裏切られることないという誇りなのであろう。このようにジムはロマンティックという点において一貫していた故に true なのである。作品の一番最後にジムの死は wedding with a shadowy ideal of conduct とマーロウに評されるが、ジムの最後を語ったマーロウ自身がその死を一番ヒロイックなものにしているのだ。なぜなら彼の情報源である、ジュエルやタム・イタム、そしてブラウンのうち、だれ一人としてジムをそのようなヒロイックな存在として見ていないからである。彼等の話の報告者としてのマーロウがジムの死を彼のロマンティシズムの完成として纏めることによって、マーロウのジムとの共犯は完成するのだが、それはマーロウ自身が十分にロマンティック

であるからである。マーロウにとって、ジムの死は他人の話の中にしか存在しないものであり、もはや自分の目で見たことという現実を欠いたものとして語られるため、一層ロマンス的になるのだろう。ゆえにロマンスを語っているのはジムと結託したマーロウであって、コンラッド自身はある程度ロマンスを客観化して見ていたということが言えるであろう。マーロウを語り手として使う事による効果はこの点にも見られるのである。[11]

このようにマーロウの語りは自らの限界をも示唆するものであるので、その外部の存在を前提としているのだ。それは英語という言語を使って話すマーロウという点にも同様であり、『闇の奥』と同様に複数の言語の存在はここでも重要な役割を果たしている。マレー諸島とそこで活動する人々や現地の住民においては必ずしも英語は絶対的な言語ではなく、そこは多言語地帯なのである。そこで話される英語も必ずしも母国語として話されるのではなく、しばしば後天的に習得したものとして話されるのである。作品前半におけるフランス人中尉とマーロウの話は恐らくフランス語によるものであったようであるし、スタインとマーロウの会話は英語とドイツ語の混ざったもののようで、スタインの発音もドイツ語の影響を受け、文法もドイツ語の語の順番になってしまう。またマーロウをパトゥサンへ連れていく船の船長は「まるで狂人が編集した辞書によって学んだかのような」英語を話す。またジュエルは母親から習ったために英語を話すことができ、ジムやマーロウとコミュニケートできるが、マーロウを嘘つき呼ばわりする箇所では興奮して現地の言葉に戻ってしまう。一方、他のパトゥサンの人物の発言がはっきりとした言葉として呈示されない理由はマーロウがその言葉を理解できないからであろう。このような英語以外の言語の存在は、例えば6章での裁判所の外でジムとマーロウが言い争う場面にも示されており、そこでは二人の背景に暴行事件の裁判の言葉が聞こえてくるが、その声は英語以外の別の言語の存在を示唆しているのだ。口論の理由を理解しようとして記憶をふりしぼるマーロウに対してその oriental voice は彼の考えを妨げるのである。(p.73) 'cur' という語の比喩的な意味と文字通りの意味との誤解から起こった口論ではあるが、マーロウはその原因のわからなさに加え、英語以外の言語の音を聞きながら英語のみならず、言葉一般の不安定性を意識するのである。[12]言葉によるコミュニケーションが成り立っているのは偶然の事に過ぎず、その本来の不安定性がこのような様々な言語を話す人々が生活している場所では明らかになるはずなのである。逆に言えばこの作品は英語を話す人々に対して向けられているために英語で書かれているのである。もともと小説を書くに際してコンラッドが英語を選んだのは英国の人々を読者対象として選んだからであろう。だからこの『ロード・ジム』という作品が語られる英語という言語と、その物語の舞台とは必ずしも適合していないのであり、そのずれは作品のそこかしこで確かに示唆されているのである。

その多言語の環境の中でマーロウは自国の人に向かって、つまり英語によってコミュニケーションができる相手に対して話をしているのだ。そしてジムについての話は絶えず、マレー諸島の対蹠点としてのイギリスを意識している。例えばジムの生家である父の牧師館はその物語の行き着く先としてジムが念頭においている場所であるし、パトナ号事件もスキャンダルとして新聞を通じて本国に大々的に伝わったものである。つまり情報や物語は白人社会、特に英国の人々に伝えられるものとして考えられるのであるから、当時の英国人に受け入れられるものとして、マーロウの語り、そしてこの作品は出来上がっているのだ。そしてマーロウの話はその繊細さによってジャーナリズムの持つ分かり易さや万人への受け入れられ易さに対抗するものとして存在する。彼は船乗りとして自らの話の舞台にいったことがあるのであり、ジムにも実際にあったことがある。同時に彼は本国に帰ってくるのであるからその話を本国の人に自分の口から伝えることが出来る。この世界を移動するということが特権的な語り手の特徴であり、商品が違う場所へ持っていくと価値が加わるのと同様に、物語も持っていく場所によって価値が与えられる。但しマーロウはあまり商売上手の商人ではなく、目指すところも資本主義の価値観とも異なる。何しろ最後には一人の人物にしか彼の話の結末は伝えられないのだ。

一方ジムの方は帰る所のない人物である。マレー諸島の人々にとって、白人とは来たとしてもいつかは帰る存在である。ジュエルやコーネリウスもジムがいつかは帰ってしまうものだと思い込んでいて、マーロウから彼は絶対に帰らないと聞かされても容易には信じられないのである。ジムには自らの情報を生かすことは出来ない。マーロウが明らかにするように父親からの手紙にも返事を出すこともなく、死ぬ間際に誰かに向かって手紙を書こうと試みたようなのだが、叶わず

に終わっている。手紙を書くということは誰かに自分の経験を伝えようとする点において、他人と繋がりを持とうとすることである。ジムにはパトナ号の時もマーロウを例外として思うように話をすることができず、最後にも自分の経験を人に話すことなく終わるのである。ジムは本国に帰らないという点において白人的ではないのであり、東洋での珍しい物語の語り手にもなれないのである。白人が東南アジアの離れた小村に来るのは何等かの目的があってのことで、それはブラウンのように略奪であったり、あるいは商売であったりするが、結局は本国に帰る事が目的なのであり、また帰ることなしにはその行動の意味がないのである。

だから本来ジムについての物語は語られることのないものなのである。それがマーロウによって救いあげられる。ジムはあくまでも白人という意味において one of us なのであるから、クルツのように白人の話が通用する世界に連れ戻さなければならない。そして何かが話され伝えられなければならないのだ。『ロード・ジム』の前半はいわば海という一種の情報の真空地帯で起こった出来事について、それが十分に説明されないさまを示し、後半は白人世界から隔絶したマレー諸島の奥地の小さな村でのジムについての物語、それは彼が帰ってこない以上、人に知られることはないような物語であるのだが、それをヨーロッパ人の世界に回収する試みであるのだ。コンラッドの作品はこのように本来は語られないような経験、物語の希少性から成り立っているのだ。だからマーロウの話は十分な物語にならないものでもあっても、語ろうと努力することによって、それを救い出さなければならないのだ。マーロウがジムについて心配するのは彼がこのまま行き場を失って放浪し続ける故郷を失った人物になるのではないかという恐れであり、21章で本国に家族のいない者でも帰ってきた時は何かその土地の spirit のようなものを感じるとマーロウが言う時、彼は世界を移動する寄る辺ない存在が救い出される瞬間のことを言っているのだ。それは英語が通じる人々という言語の問題も関係してくるだろう。だからジムの話は理解の可能性をひとまずおいても誰かに伝えられなければならないのであり、コンラッドは少なくとも一人の受け手を確保しなければならなかったのである。手紙は話した言葉と違って後に残るものであり、宛名も定まったものである。手紙と言う形式によってマーロウの語りは物質的なものとして少なくとも確実に相手の元に届く。このような確実さのみがマーロウの願うところのものなのである。ジムの書きだしだけの手紙は他人に伝達しようとする彼の意志だけを残したが、マーロウの手紙はそれに応える形でジムの死という終りを、誰にも語られない事から救い出そうという試みを示すものなのであり、『ロード・ジム』という作品全体もそのような観点から読まれるべきものなのである。

註

(1) Hillis Miller, *Fiction and Repetition.*(Cambridge: Harvard University Press,1982) p.32.

(2) Joseph Conrad, *Lord Jim.*(Oxford:Oxford University Press,1983)
『ロード・ジム』からの引用は全てこの版に拠り、以下本文中にページ数を記す。

(3) Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century.* (Berkley: University of California Press, 1979) p.296を参照。

(4) この点については、Jeremy Hawthorn, *Joseph Conrad: Language and Fictional Self-Consciousness.* (London: Edward Arnold,1979) の *Heart of Darkness* を扱った章に詳しい。

(5) 解釈については Cedric Wattsの Penguin版の *Lord Jim* の注を参照。

(6) Edward Said, *The World, the Text, the Critic.* (Cambridge: Harvard University Press,1983) の中のコンラッド論の Conrad: The Presentation of Narrative の中でコンラッドはナラティヴを utteranceに基づかせていると述べている。目に見えるのものとの関係については、
'Writing cannot represent the visible, but it can desire and, in a manner of speaking, move toward the visible without actually achieving the unambiguous directness of an object seen before eyes.' と述べている。

(7) Elain Showalter, *Sexual Anarchy,* (London: Bloomsbury, 1990)では『闇の奥』に関してコンラッドの女性の扱い方を指摘している。それらはこの作品にもあてはまるであろう。

(8) 註2の Oxford 版の *Lord Jim* の Introduction を参照。

(9) Terry Eagleton, *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory.* (London: Verso, 1976) を参照。

(10) これは Edward Said の Norman Sherry ed. の *Joseph Conrad: A Commemoration.* (London: Macmillan, 1976) 所収の、'Conrad and Nietzshe' に拠る。

(11) このロマンスに関しては Fredric Jameson は *The Political Unconscious.* (New York: Cornell University Press, 1981) p.213 において、フローベールとは違ってコンラッド自身がそのような幻想に取り付かれていると見ているようだが、マーロウという語り手の特異性が考慮に入れられるべきであろう。

(12) フローベールはコンラッドに強い影響を与えていると見られているが、Cedric Watts は *A Preface to Conrad.* (London: Longman, 1993) の中で『ボヴァリー夫人』の中のロドルフがエマを誘惑する言葉と農業共振会の演説の声が併置され、交錯する場面をあげ、このような手法がコンラッドに影響を与えていると見ている。このジムとマーロウの口論の場面だけでなく、マーロウとジュエルが英語で話している場面で、歌声が聞こえてくる場面も (33章) 同様の効果をねらってのことかも知れない。